

# 『女尊男卑の女の園』

共学に向けての準備期間で

男女比が狂った学校で共学化反対女子による  
少数派男子への性的いじめが吹き荒れる！

【CFNM】 【玉責め】 【短小責め】

玉子王子 著

## 1章 盗んだパンツはこの下か?! 犯人は脱がせて調べる

——おお、女子ばかりだ。

空敏は、中学時代クラスの最底辺だった。

修学旅行では彼をどのグループに入れるかで押し付け合いが起こり、腰抜け教師は彼が悪いことをしたかのように文句を言った。

今日、高校の入学式。

体育館に三百人ほどの生徒が並び、後ろに保護者が並ぶ。

左右に教師と、招待客。

大体は、普通の学校と変わらない風景だ。

ただ、生徒の男女比が桁違いだった。

女子が九割を超える。

女子三百人近くに対し、男子は十五人ほどなのだ。

——やっぱり、元女子高は違うな。

如尊女子高は後数年で、共学化されるという。

そのときには如尊高校となるわけだ。

その前の準備というか実験で、一年生三クラスに五人ずつ男子が入学することとなった。

一クラス的人数が三十人ぐらいで、三学年九クラス。

大体三百人の女子の中で、男子は十五人。

唾を飲む空敏。

ごく普通の見栄え。

それがクラスで最底辺に落ちたのは、ただ単に文化部の中でもオタク系と見なされる部に所属したというただそれだけのことだった。

スクールカーストなど、顔と部活で大体階層が定まるものだ。

まあ、それはどうでもいい。

——今日からハーレム暮らしで、悲惨な過去とはおさらばだ。

最底辺では、彼女どころかまともに女子と話すことも出来なかった。

それが、これからは周り中女子なのだ。

周りに立っている、四人の男子を見る。

皆、何処か緊張の面持ちだった。

——どうしたんだ、嬉しくないのか?

「お前、何でそんな平気な顔なんだよ」

ちょっと不良っぽい、苦手な感じの男。

「なんでって、女子ばかりで……」

「確かに俺も……ここに来るまでは女子に囲まれてハーレムと思ってたけど……」

チラ、と周りを見る不良っぽい男。

すでにクラス分けされているので、近くにいるのはクラスメイトの一年生ばかりだ。

彼の目線に気づいた小柄な女子。

特に複雑な背景もなく緑の髪をした少女だが、それが歯を見せて明るく笑う。

笑ってから、パンパンとスカートの前を叩く。

不良っぽい男が慌てて目をそらす。

緑の髪の少女のジェスチャーの意味は、正直空敏にはよく分からなかった。

わからないが、少し膝を締めてしまう。

股間を叩くというのは、男と女ではまったく意味合いが違うだろう。

——キ〇タマ叩いてやるって意味？ いや、そんなジェスチャーやられる理由はない。でも、それじゃどういう意味だ？

過剰反応だろうか、と思う空敏。

周り中女子ばかり、というのもその反応の理由だろう。

圧倒的少数派なのだ。

教師を見ても、校長だといって演説していた六十位の人物以外、全員女性教師だ。

不安になってくる空敏。

なぜか。

考えてもよく分からない。

よく分からないが、やはりその不安は男子が圧倒的少数派であることから来ているのだろう。

——女子なら、元々弱いというか、弱くあってもいい存在だろう。だから少数派なら普通の状態なら大事にしてもらえらるだろう。でも男なら？

男として強くあらねばならないのに、圧倒的に力で負ける少数派だったら、どういう顔をしていけばいいのか。

そうそう居心地が悪い場所にきてしまったのではないかと一瞬不安になる。

が、打ち消す。

二十対一の数の差があれば、自分を好きになってくれる子も現れるかもしれないと思う。

彼女でも出来れば、もうこんな不安な日の事など笑い話だろう。

考えているうちに、入学式が終わり、客や親たちが帰っていく。

今日は教室で挨拶だけして、学校は終わりの予定だ。

教室。

三十人ほどの女子と、五人の男子。

六対一。

それはまだましな男女比なのだ、この如尊女子高では。

上の学年には男子が一人もいないのだから。

——っていうか、まてよ？ それじゃ去年まで女子と女教師三百三十人ぐらいいに対して、男は校長一人ってこと？

軽く考えればハーレム。

重く考えれば肩身がクッソ狭い地獄だろう。

共学化を熱心に推進したのは校長だと何処かで聞いたので、後者だったと考えるのが自然だ。

——ってというか、俺ら地獄へ道連れってこと？

男子がもう少し増えて、二割くらいになれば男の勢力もある程度確保され、同時に女が多い形も変わらない。

その時期に入った者が一番幸運ではないか。

いや、そういう時期があるのかはわからないが。

「藤木由紀です、よろしく。っていっても、大体は中学からのエレベーターだけだね」

「そうよね、大体は、ね」

目線を感じる。

後ろの角に集まっている男子五人に、女子たちが目を向けてきていた。

「いい感じだったのになあ、女子ばかりだと気楽で」

目の釣りあがった少女。髪は水色。ショートで外跳ねだ。

「おい、どういうことだよ」

不良っぽい男。

「男子の自己紹介、まだ聞いてないよ。聞きたくないけどね」

「奥中良鉄！」

机を叩く不良というか、奥中。

なんとなく、名乗っていく男子たち。

「愛間空敏」

空敏も名乗る。

「へー。ああ、私は毛利琴恵。先に行っておくけど、私は共学化反対派だから」

「賛成派なんていないよ！」

「そうよ、男子がいたらうざいもん！」

かなりひどいことを言う。

眉を顰める男子たち。

だが、別に口が回るわけでもないので黙っている。

「はいはい、そこまで」

教師が手を叩く。

大山静という女教師である。三十少し、巨乳というより爆乳で、周りが女子だらけでなければ男子のある種のアイドルになっていたかもしれない。

「一通り、自己紹介ね」

促され、女子のそれが続く。

最後は、かなりガッチリした体格で、それでいて結構柔らかさそうで乳肉もポヨンポヨンした感じの子だった。

「火野咲花です……私はそんなに、男子を追い出したいとかは」

「咲花！ 男子は抹殺するしかないんだよ！」

水色の髪の長身少女。琴恵が机を叩く。

無茶苦茶いっているが、別に誰も大した反応はしない。

「うふ、面白くなってきそうね」

小柄な少女、由紀。

共学化反対、などと言っても、琴恵のように熱心な感じではない。

どうも、それを口実に現状を楽しもうとしているような、妙な感じが空敏にはする。

——でも、この状況をどう楽しむってんだ？

由紀がふと、空敏が首をかしげているのに気づく。

——んー、あのオタクっぽい奴、なんか悩んでる？　すぐに頭空っぽにしてやるよ。

俯く。

笑い出しそうになるのを必死で抑えた。

カバンを取り出す。

「あれ、ちょっとみんな、いい？」

どうした、と長身水色の髪の琴恵。

「予備に持ってきたパンツが、ないの」

一斉に、女子たちが空敏たちを見る。

「え？　ちょ、ちょっと待ってよ。俺は違うよ」

「俺はってなによ。じゃあほかの人？」

「いや、ほかの奴らも違うって」

「でも、男子以外の誰が盗むの？」

空敏は青ざめ、他の男子を見る。

「何で男子限定なんだよ！　女子が嫌がらせしたのかもしれないだろ！」

奥中。

他の男子もそれぞれ文句を言うが、女子が黙って睨んでくると徐々に黙るしかなくなる。

「まってまって、証拠もなくそんなこといっちゃだめよ」

教師が割り込む。

「先生の言うとおりで」

ほっとする空敏。

教師も共学化反対で、男子への嫌がらせに加担しないかと何処かで不安だった。

だが、そういういい加減な教師でもないようだ。

「まずは、彼らに潔白を証明する機会を上げないと」

それはどういうことなのか。

空敏は意味がよく分からなかった。

犯人を見つけろ、とでも言うのだろうか。

潔白の証明が一々「真犯人の確保」では難しすぎる。

「先生、それって」

「持ち物検査よ。もちろん、全部ね」

全部。

普通検査は全部ではないかと空敏は思う。

甘かった、とすぐ後に気づく。

「さ、次は服よ」

「え、服って」

「下着盗んだ人は、自分で着る事もあるみたいだから」

「それって……」

「パンツ姿になれってこと」

サービスシーンが売りのアニメで、これからそれが始まると期待している飢えた男のような目を向けてくる女教師。

「潔白なら脱げるはずよ！」

「そうよ、恥ずかしがることないでしょ！」

「男ならさっと脱ぎなよ！」

「なんなら、全部脱ぐ？」

「それいいね！ 見たくないけど！」

「私見たこと無い！」

「カマトトぶってんじゃねーよ！」

笑い声。

男子がいるなどお構いなし。あまりにも少数だから「男の目がある」うちに入らないというのか。

まさに女の園という気もするが、何処か恐怖を感じる空敏。

と、周りから女子の手が伸びてくる。

「あっ、わかった、脱ぐから！」

自分で脱がないと、本当にパンツまで取られかねないと思う。

観念して、パンツ姿になる。

「みんなブリーフじゃん」

「大人ね」

「っていうか……愛間のモッコリ」

血の気が引く愛間空敏。

「かなーり、控えめじゃね？」

「あ、隠した！」

「え、愛間くんチ○コ小さいの？」

「オタクってムツリだからチ○ポデカイもんじゃないの？」

「どういう理論よ！」

縮み上がる空敏。

他の男子も、真っ青で股間を押さえる。

「も、もういいだろ、先生。みんな自前のパンツだし」

「そうね。って、誤魔化されるとでも？」

女教師が空敏のパンツを引っ張る。

「あ、ちょっと……」

「盗んだパンツ穿いて、上からブリーフという二段構えもありうるわよ」

「さっすが先生！ 話がわかるっ！」

手を叩くのは、小柄な少女由紀。目をギラギラと輝かせて、それを男子たちに向けていた。  
パンツではなく、顔に向いている。

どうも彼女はパンツを脱がして中身を見たいのではなく、そうされた男子の屈辱や羞恥、苦痛の表情が見たいようだ。まさしくドS少女といえた。

「話がわかるってなんだよ!？」

必死でパンツを抑えながら叫ぶ空敏だが、女子たちの盛り上がりはまったく衰えない。

「それじゃ、パンツ脱いで見せなよ！」

「それとも、犯人だって自供する？」

「脱いだら潔白証明できるなんて簡単でしょ？ どっかに隠してるとまで疑わないんだから」

「ま、まって……こんなのおかしいでしょ？ みんな冷静になってよ」

空敏が教師から必死で逃げながらいう。

が、誰も聞かない。

「いいからおチンチ〇見せろよ！」

「そうだ、減るもんじゃなし！ チンチ〇見せろ！」

「見せろ！」

「見せろ！」

「おチンチ〇見せろ！」

なんとなく、空敏は気づかざるをえなかった。

これは下着が無くなったから、男子を疑って騒ぎが起きた、ということではない。

いや、形としてはそうだが、根底にあるのは別のものだ。

——こいつら、男子に嫌がらせして追い出す気なんだ。

共学に反対して。

試験的に受け入れた男子が次々と辞めれば、共学化は頓挫せざるをえない。

「チンチ〇見せろ！ そんなに小さいの!？」

一際大きな声で煽る由紀。

共学化に反対するために、男子に嫌がらせをした方がいいのではないか。

そういう考えが、共学化を聞いた中学卒業直前から、由紀たちの間ではあった。

だが、そのために嫌がらせしようと結託するまでには至っていない。

至っていないが、何かことが起きたとき、男子への嫌がらせへ皆が動く方向性ぐらいは確立している。

だからこそ、現状の騒ぎである。

でなければ、普通の状態で女子〇生が一物を見せろと同級生に叫ぶわけがない。

「もう面倒だ、パンツ分捕ってやろうよ！」

琴恵。長身で柔道部員なので、一人でも男を押さえ込むだろう。

それが、仲間と一斉に掴みかかって来るのでは男子たちもたまらない。

琴恵。長身で柔道部員なので、一人でも男を押さえ込むだろう。  
それが、仲間と一斉に掴みかかって来るのでは男子たちもたまらない。  
「うわあああ！ や、やめて……」

「ああっ、奥中のチ○ポ包茎じゃん！ 小さいし！」

「やだあ、ヤンキーっぼく決めてるのに、おチンチ○は小さいんだ！」

「キ○タマキュツと縮んでくよ！ ビビってる！」

「や、やめてくれ……」

顔を青くしたり、赤くしたり、膝を締めて必死に抗う奥中。  
しかし、羽交い絞めにされた状態では股間を隠しようもない。



「うわあああ！ や、やめて……」

「ああっ、奥中のチ○ポ包茎じゃん！ 小さいし！」

「やだあ、ヤンキーっぼく決めてるのに、おチンチ○は小さいんだ！」

「キ○タマキュツと縮んでくよ！ ビビってる！」

「や、やめてくれ……」

顔を青くしたり、赤くしたり、膝を締めて必死に抗う奥中。

しかし、羽交い絞めにされた状態では股間を隠しようもない。

「奥中は犯人じゃないみたいね。さっさと脱げばこんな事にならなかったのに。確かにおチンチ○超小さいけど、気にすることないわよ。大きさじゃないんでしょ？ 知らないけど」

仲間と羽交い絞めにさせ、しゃがんで奥中の男の部分に凝視しつつという琴恵。

——ここまではっきり教室の中でチンチ○複数の女の子に観察されちゃ、威張れないでしょ。何事

もはじめが肝心よね。っていうか、チ○ポ小さいわ。うちの弟のぐらいだから、明らかに高校生としては極小チ○ポよね。

他の男子たちも、次々に脱がされていく。

「ほら、ほかの子も脱いで、潔白証明してるのよ。っていうか、なに？　うちのクラスの子、チンチ○残念な子ばかり？　愛間くんはどうか？」

「や、やめ……あっ」

「うわっ、皆見てよ！」

「何よ由紀、あっ、うそ……ヤバイよ、これ、近所の幼稚園の子より小さい……」

「咲花の方がヤバクね？」

「あ、トイレに連れて行ったりしてるから、知ってるだけだよ？」

顔を赤くし、ブルンと巨乳を揺さぶる咲花。

「っていうか、もういいでしょ？　下にパンツはいてないのはわかったんだから」

「それと、愛間……っていうか、もう空敏でいいよね？　チ○ポ小さいんだし！」

「だよ、名前呼び捨てでいいっしょ、短小包茎くんは」

「まあまあ皆、そういわない。キンちゃんはプリッと普通だよ。まあ、縮んでるけど」

「縮んでちゃよく分からないでしょ、先生」

「そうよ、縮んでちゃわからない。うちのクラスの男子の男性器は残念ながら平均以下ばかりみたいだけど、立てばまだわからない……という僅かな希望はあるわ」

「っていうって、縮んだからってこれ小さすぎるし！　全員皮被ってるし！」

笑いが広がる。

男子五人はすでに羽交い絞めにされてはいないが、女子全員に一番隠すべき部分を観察され、心が折れていた。

せめて平均サイズならまだしも、そろいも揃って並み以下の短小ぞろいでは気合の保ちようもない。

全員棒立ちで、手も垂れ下がっている。

股間は丸出しである。

周りで、制服の女子たちが手を叩いたり、肩を叩きあって笑っている。

「情けないわね、短小クラスじゃないの、うちは！」

「っていうか、小指で隠せば女子だけのクラスだって嘘つけるんじゃない？」

「由紀！　かわいそうでしょ！」

「咲花あ……短小って可哀想なことなの？」

「あ、いや、それは……」

「短小はそりゃ可哀想だよ！」

わざわざ小指で、男子たちの男の部分の撫でていく由紀。

「うひひひ、本当に楽しくなりそうじゃない。校長様様だね……カカア天下の金無しだとばかり思ってたけど……」

「金無しって私たちもじゃない」

「私の言ってる金無しは、お小遣いが少なくて常に金欠ってことだよー」

「え、あ、そうなんだ？」

顔を赤くする咲花。

その背中に飛びつく小柄な由紀。

「どういう意味の金無しだと思った？ タマタマ？ 男の大事な二つのタマタマのことだと思った？」

「し、知らない」

ふざける二人を尻目に、長身の少女、琴恵は男子たちを見下ろす。

——絶対追い出してやるから。実験的な入学だから、すぐにうさぎ高校に転入できる条件だってことは知ってるのよ。別にひどいことじゃない、こいつらだってこんな男女比狂った所にいてもしんどいだけだろうしね。

「お、お前ら……こんなことして」

奥中。

何とか、気力を振り絞って琴恵を睨む。

と、琴恵は再びしゃがみこんで、奥中の皮を摘まむ。

「本当に小さいね、奥中のおチ○ポ」

「ひっ」

真っ青になり、必死で立て直した心が再びへし折れる奥中。

それでも、追撃をやめない琴恵。皮を引っ張る。

「ぐに一、っと。包茎チ○ポ兄貴は、皮だけ男前ねえ。これに中身が見合うと想像したら、かなり巨根じゃない。幻だけどね」

——男女半々なら、こんな目に合わないのよ？

そういう問題だろうか？ と思えるようなことを考える琴恵。

ともかく、こうして空敏たちのCFNM満載の地獄の高校生活が始まる。

「っていうか、皆短小だけど、空敏のはけた違いよね……」

小声で呟く琴恵。

体験版終わり

金蹴り CFNM 地獄はこれからです

続きは製品版でお楽しみください